

軽度の知的障害や発達障害のある生徒の内面を重視した指導法に関する研究（平成30年度）

研究代表者：武田鉄郎

共同研究者：小畑伸五 中筋千晶 辻岡麻起子 和田淳子
久保田竜生 道上里砂 鶴岡尚子 井上典子 小林史
(附属特別支援学校)

北岡大輔* 田川君枝* 田中千映* 土橋雅美* 井上いずみ**
(大学院教育学研究科*、特別支援教育特別専攻科**)

1. 経緯と目的

近年、特別支援学校在籍者数の増加しており、その中でも知的障害特別支援学校高等部在籍者数の増加の割合が大きい。また、知的障害特別支援学校在籍者のうち、知的障害の程度が軽度と判定された療育手帳を有する在籍者が小学部、中学部、高等部と学年の高い学部ほど多い傾向にある（国立特別支援教育総合研究所, 2010）。知的障害特別支援学校高等部における生徒指導上の課題としては、特に不登校、不健全な異性との交遊、精神症状等が多く挙げられている（国立特別支援教育総合研究所, 2012）。知的障害特別支援学校高等部に在籍している軽度知的障害や発達障害のある生徒の約半数が情緒および行動上の課題を抱えているという研究結果（小畑・武田, 2017）もある。そういった適応上の課題がある生徒は、自尊感情が低く、対人関係にも問題を抱え、失敗を恐れるあまり、発表等学習の際にも極端に消極的になってしまいやすい。

本校高等部の普通科総合産業コース（高等部段階から本校へ入学する生徒を対象とするコース：以下Sコース）に入学してくる生徒は、知的障害の程度は軽度である場合が多い。学校からの引き継ぎをもとに調査を行うと、そのほとんどが小・中学校段階時に不登校やいじめ被害を経験してきている。そのため、自分に自信が持てなかったり心理状態が不安定だったりすることがあり、トラウマを抱えていることも少なくない。

また、本校では、子どもの行動や情緒の特徴、および多面的な問題性を評価する客観的アセスメント指標としてAchenbachが開発した尺度であるTeacher's Report Form [TRF]（児童思春期保健研究会, 2003）を毎年全員に実施している。また、毎年1年生にはTSCC〔トラウマ性の体験の後に生じる精神的反応ならびにそれに関連した心理的な症状を評価するための自記式検査〕（Jブリア, 2009）を実施している。そういったTRFやTSCCの結果から、Sコースの生徒の多くが、心理的な不安定さを抱えていることは明らかになっている（武田他, 2012, 2013, 2014）。

そこで、Sコースでは平成24年度より、自己について見つめ、気持ちを整理し、自ら生き方を考えていく領域・教科を合わせた指導である「セルフデザイン」を教育課程に位置付け指導を行ってきた。この「セルフデザイン」は、生徒たちが互いに関わり合うことを大切にしながら、共に課題に向き合い、自他の価値を認め合っていくこと、自分の将来について自分自身で答えを導き出していくことを目的としている。基本的には学級単位で授業を行い、内容に応じて他学年と共同で取り組むこととしている。

類似した取り組みとして、発達障害やその可能性がある子どもたちの感情コントロールを目的に、自分自身を振り返るグループワークの開発も行われている（山本・武田・小山・宇井, 2017）。滝吉・田中(2010)も広汎性発達障害者を対象として、自己理解の視点から見た集団療法の意義について言及している。また、武田(2017)は、学習上、生活上で困難を抱えている発達障害のある子どもに対する有効な手法として、「提案・交渉型アプローチ」を取り上げている。セルフデザインにおける自分の気持ちを言語化する取り組みでは、この「提案・交渉型アプローチ」の視点は効果的であった。

今年度は、自己理解が進んできた2年生についてセルフデザインの授業実践とともに振り返り、本研究で進めている自分づくりプログラムについて考察を行う。

2. 授業実践

セルフデザインの授業は、1年生から3年生までの指導内容を見通した3年間指導計画を作成し、実践を進めてきている。3年間指導計画は資料1に示す。3年間指導計画では、1年生を「仲間づくり及び自信回復」、2年生を「自己理解」、3年生を「自分の将来を見つめる」時期として押さえている。一方で、セルフデザインは生徒同士、あるいは生徒と教師との関係性を大切にして、一人一人が自分をつくり上げていけることをねらいとしている。そのため、計画のみにとらわれるのではなく、生徒たちの身の回りに起こった事象も柔軟に取り上げ、ダイナミックな指導を行うことも重要視して取り組むようにしている。ここでは2年生に取り組んだ「マイリバー」(別府, 2014)を授業実践として取り上げる。

(1) マイリバー

過去の実践から、自分の気持ちを言語化していく取り組みが心理的不適応を低減させ、自己理解の形成に有効であることは見出されてきている。これまでの過去を振り返り、良かったことと辛かったことなどを付箋に書くことで、自分の気持ちを言語化できるようにし、他者と共感しながら、今の自分と比べ成長したことを実感できるようにした。過去の出来事にこだわっている生徒、物事の捉え方が自分自身を苦しめている生徒、トラウマを抱える生徒がいる中で、過去の出来事を振り返る時には注意を払う必要がある。そのため、付箋の色を2枚用意し、みんなに伝えても良い出来事はピンク色の付箋に、伝えたくない出来事は水色に記入するようにした。高等部1年生時には、こういった自分と向き合うこと、言語化すること、友だちと共感することなどは難しい面があったが、2年生も後半となり、そういった課題にも向き合えると考えて取り組んだ。授業の当初の予定では、生まれてから現在までを大きく捉え、1枚にまとめる様子であったが、生徒たちは思いの外、たくさんのことを書き始めたため、**1**誕生から小学校卒業まで、**2**中学校時代、**3**本校高等部入学時から現在(高等部2年生10月)までの3枚に分けることとした。記入することとしては、生徒たちの意見も参考にしながら、**①**どんな性格だったのか、**②**一番努力したこと、**③**一番楽しかった(嬉しかった)こと、**④**一番辛かった(悔しい・悲しかった)こと、**⑤**将来の夢、**⑥**好きだったもの(趣味)、**⑦**好きな人はいたか、**⑧**好きだった場所、**⑨**所属クラブ、習い事などとした。以下、各自のエピソードを抜粋する。

A

| | |
|----------------------|---|
| 1 誕生から小学校卒業まで | <ul style="list-style-type: none"> ・友達ができることが嬉しかった。 ・明るい性格だったが、イライラすることがあると、物を叩いたり投げたりして壊すことが多かった。 ・ゲームソフトやカードをとられた。 ・嫌なことがあると近くの神社に家出した。 |
| 2 中学校時代 | <ul style="list-style-type: none"> ・人見知りだった。 ・新しい友達ができ嬉しかった。 ・女の子にからかわれて、女の子が嫌いになった。 ・特別支援学級に行く理由がわからなかった。 ・自分が障害者であることを知ってびっくりした。 |
| 3 高等部入学から現在まで | <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションがとれるようになった。 ・学校でいろいろなことをがんばった。(現場実習、作業学習、ランニングなど) |

B

| | |
|----------------------|--|
| 1 誕生から小学校卒業まで | <ul style="list-style-type: none"> ・おとなしい性格だった。 ・修学旅行が楽しかった。 ・先生がこわかった。 ・友達に嫌なことをいろいろと言われた。 |
| 2 中学校時代 | <ul style="list-style-type: none"> ・少ないけど友達ができうれしかった。 ・特別支援学級でとても優しい先生がいて嬉しかった。 ・友達にたくさんからかわれた。 ・男の人が怖くなった。 ・毎日、泣きながら帰った。 |

| | |
|----------------|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・嫌でもがんばって学校に行った。 ・家族で支え合った。 ・先生に相談してもあまり状況は変わらないと思った。 |
| 3] 高等部入学から現在まで | <ul style="list-style-type: none"> ・休みの日とかにいっしょに遊びに行く友だちができて良かった。 ・自分から友達に声をかけたり、遊びに誘ったりするようになった。 ・いろいろなことをがんばったり、気が進まないこともしたりするようになった。(キャンプ、大きな声を出すこと、ランニング、陸上大会など) |

C

| | |
|----------------|---|
| 1] 誕生から小学校卒業まで | <ul style="list-style-type: none"> ・5歳になるまでしゃべれなかった。 ・いじめにあって、ほぼ毎日泣いていた。いじめられた理由を自分が好きだった物(ポケモン、仮面ライダー、マンガ)の責任にして投げ出した。 ・修学旅行とお別れ遠足が楽しかった。 |
| 2] 中学校時代 | <ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学級で新しい友達ができ嬉しかった。 ・嫌いな先生がいた。 ・小学校からの友達や通常学級の友達に見捨てられた。みんなに見捨てられていることによく気付いた。 ・通常学級の人たちが怖かった。 ・女の子とほとんど話をしなかった。 ・人をあまり信用できなくなった。 |
| 3] 高等部入学から現在まで | <ul style="list-style-type: none"> ・友達がたくさんできて良かった。 ・中学校の時に仲が悪かった友達と仲良くなった。 ・学校でいろいろなことをがんばった。(現場実習、キャンプ、作業学習、ランニング、夏季クラブ、熊野古道ウォークなど) ・運動が好きになった。 |

D

| | |
|----------------|---|
| 1] 誕生から小学校卒業まで | <ul style="list-style-type: none"> ・えらそうな性格で友達をよくいじっていた。 ・友達には恵まれていた。 ・ストレス解消法は寝ることだった。 |
| 2] 中学校時代 | <ul style="list-style-type: none"> ・自分のことをいじめる友達がいたが、仲の良い友達もいた。 ・学校の先生に意味もわからず怒られ、ほぼ全員の先生が嫌いになった。 |
| 3] 高等部入学から現在まで | <ul style="list-style-type: none"> ・入学当時はクラスになじめなかった。 ・学校のルールが細かくて嫌だった。 ・騒がしいのが苦手な新しい友達をつくることができるか不安だった。 ・先輩の話を聞いて、先生を信じてもいいかと思った。 ・人を信じてもいいかと思えるようになった。 |

書き上がった3枚の用紙を参考に、良かったことは上がり、良くなかったことは下がるというように現在までの道のりを川の流れるように表した(図1)。今回は、友達とのちがいをわかりやすく比べるために、1枚の紙に1人ずつ川を描いた。エピソードからもわかるように全員が中学校時代に下がり、高等部入学後に上がってきていた。

友達のエピソードを聞いて共感しながら一人一人の発表を聞いたり、質問をしたりしていた。みんなに伝えたくない出来事は水色の付箋に記入していたが、いざ、発表する時には、全員、水色の付箋についても気にせず、発表していた。

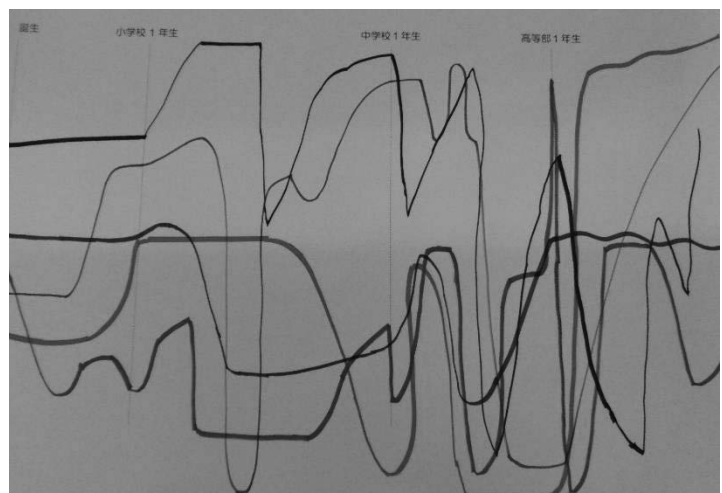


図1

発表の中では、「友達をつくる努力をしたんやね。」「僕もいじめられてた!」、「今はいい友達いるよね。」「中学校の時と比べていろいろなことに挑戦できてるよね。」など共感する言葉だけではなく、「女の子にからかわれて、女の子が嫌いになった。」←「女の子全員がそんなことをするわけではないよ。優しい女の子もいるよ。」「嫌でもがんばって学校に行った。」←「それでも毎日、学校に行ったのはすごい!そんなわるい人ばかりではないよ。」など物事を良い方向に捉える言葉がけをしている生徒もいた。また、「先生に相談してもあまり状況は変わらないと思った。」→「今はいろいろな人に相談できる」、「学校のルールが細かくて嫌だった。」→「もっと自由にしたかったが、今はルールの必要性を考えて行動できるようになった。」など変わった自分を捉えることができている言動もあった。また、全員がいじめられていた経験があり、「自分はされて嫌だったことはみんなにはしない」との発言もあった。「特別支援学級に行く理由がわからなかった。自分が障害者であることを知ってびっくりした。」という自己理解に関する発言も見られた。

3. まとめ

以上、授業実践を中心にセルフデザインの成果を述べた。Sコースの生徒の多くは中学校の時に、発言を否定されたり、無視されたりした経験を持っている。また、自信をなくし、学習に向かう態度も低下している場合が多くある。そのため、入学時には、学習面のみならず多くの場面で消極的である。そういったSコースの生徒にとってとくに大切なことは、まず、学習に向かう意欲や態度を育てることであると考えられる。そのためにSコースに在籍している軽度の知的障害や発達障害、内面にトラウマがあるような生徒に関しては、過去の自分と向き合い、気持ちを整理していくための、セルフデザインの授業の役割が重要であると考えられる。

トラウマティックな体験の後、精神的に成長を遂げる現象をPTG (Posttraumatic Growth: 心的外傷後成長) という。認知活動 (とくに「建設的な反すう」、すなわち出来事に何か意味があるのではないかと考えたり、体験を自分の人生にどう組み込むことができるかなどと思いをめぐらせたりすること) や適応的なコーピング及びソーシャルサポート (自己開示、聞き手の受容的な態度) がPTGに正の影響を及ぼすことなどは一貫した結果として報告されている (宅, 2012)。

また、本校では、平成27年度より「知的障害のある子どもの学び続ける力を育てる教科学習」という研究テーマの中で、伝え合い学び合いの教科学習に取り組んできた。教科学習を行う上でもセルフデザインで培った力が生かされているように感じる。入学時には、消極的な1年生が「まちがっていい」、「失敗してもいい」という雰囲気の中で少しずつ自分の考えを発表したり、前向きに取り組めたりするようになってきている。今後の課題としては、セルフデザインや教科学習、他の授業とのつながりを大切にしたい教育課程を考えていくことである。

セルブテザイン 3年間指導計画

| 1年生 | 2年生 | 3年生 |
|--|--|--|
| 仲間づくり・自信回復 | 自己理解 | 将来に向けて |
| ・オリエンテーション ・「わたしの」生活の心構 ・高校生の自分 ・学期の予定・係・目標 ・立会演説会に向けて | ・オリエンテーション(2年生のセルブテザイン) ・「わたしの」生活の心構 ・学期の予定・係・目標 ・立会演説会に向けて | ・オリエンテーション(3年生のセルブテザイン) ・「わたしの」生活の心構 ・学期の予定・係・目標 ・立会演説会に向けて |
| ・セルブテザインの学習の目的を知る ・自分で生活管理をしていくために、自分の心構を考える ・中学校までの生活との違いを意識する ・高校生としての自分を考える ・自分の課題を見つめ、目標を立て方を知る ・自分の性格や気持ちを考えて、効果的に伝える方法を考える ・自分がかけがえない存在であると意識する ・身体が発育、男女の身体の違いについて知る ・英事柄健康に及ぼす影響について知る ・食生活や栄養素の役割や生活習慣について知る ・運動を継続することが健康維持につながることを知る ・具体的な運動計画を考える ・場面ごとでの社会人らしいふるまいやマナーについて知る ・周りのことを意識した行動を考える | ・セルブテザインの学習の目的を確認 ・自分で生活管理をしていくために、自分の心構を考える ・自分の課題を見つめ、目標を立て方を知る ・自分の性格や気持ちを考えて、効果的に伝える方法を考える ・自分がかけがえない存在であると意識する ・身体が発育、男女の身体の違いについて知る ・英事柄健康に及ぼす影響について知る ・食生活や栄養素の役割や生活習慣について知る ・運動を継続することが健康維持につながることを知る ・具体的な運動計画を考える ・場面ごとでの社会人らしいふるまいやマナーについて知る ・周りのことを意識した行動を考える | ・セルブテザインの学習の目的を確認 ・自分で生活管理をしていくために、自分の心構を考える ・自分の課題を見つめ、目標を立て方を知る ・自分の性格や気持ちを考えて、効果的に伝える方法を考える ・自分がかけがえない存在であると意識する ・身体が発育、男女の身体の違いについて知る ・英事柄健康に及ぼす影響について知る ・食生活や栄養素の役割や生活習慣について知る ・運動を継続することが健康維持につながることを知る ・具体的な運動計画を考える ・場面ごとでの社会人らしいふるまいやマナーについて知る ・周りのことを意識した行動を考える |
| ・食と健康① ・運動と健康 ・社会人として(エチケット)集団の中で(私の) | ・校内宿泊学習 ・現場実習 ・現場実習報告会(コース) ・夏休みの課題 | ・現場実習 ・現場実習報告会(コース) ・校内宿泊学習 |
| 1学期 | 1学期 | 1学期 |
| ・学期の予定・係・目標 ・友だちを知らう | ・学期の予定・係・目標 ・自分の知らう ・認知のときは | ・学期の予定・係・目標 ・自分の知らう ・認知のときは |
| ・思いやりについて ・働くとうこと ・現場実習のまとめ ・アサーティブな会話 ・私生活の大切なもの(自己の価値観) ・セラティクススタイル ・学期のまとめ | ・自分の課題を見つめ、目標を立てる ・友だちが自分とは違う考え方をしていることを受け止める ・相手の気持ちや考えを聞き取り、自分の考えを伝える ・働くことの意味について考える ・現場実習の目的を考える ・職場で気付いたことや感じたことをまとめる ・表現を上手に伝えること ・自分の周りにほめかけがない大切な人があることを気付く ・冬休みの生活に目標を持つ ・楽しかったことや頑張りを振り返る | ・自分の課題を見つめ、目標を立てる ・友だちが自分とは違う考え方をしていることを受け止める ・相手の気持ちや考えを聞き取り、自分の考えを伝える ・働くことの意味について考える ・現場実習の目的を考える ・職場で気付いたことや感じたことをまとめる ・表現を上手に伝えること ・自分の周りにほめかけがない大切な人があることを気付く ・冬休みの生活に目標を持つ ・楽しかったことや頑張りを振り返る |
| ・学期の予定・係・目標 ・人との距離感(パーソナルスペース) | ・現場実習 ・現場実習報告会(高等部) | ・現場実習 ・現場実習報告会(高等部) |
| 2学期 | 2学期 | 2学期 |
| ・1年生の言葉 ・1年間の振り返り ・学期・年間のまとめ | ・1年生の言葉 ・1年間の振り返り ・学期・年間のまとめ | ・1年生の言葉 ・1年間の振り返り ・学期・年間のまとめ |
| ・セルブテザインの学習(セルブテザイン)は3年間持ち上がった上で、自己の変化を見つめ返るようとする。 ・生徒間や学校で課題が起きたときには、セルブテザインの時間を使って、生徒が自分たちの問題として考え自分たちの問題として解決を目指す。 ・この計画は3年間で進めたい内容を盛り込んでいる。実施する時期については、生徒の美徳を考えた上、その他、必要に応じてアレンジを見ながら実施しする。 ・年間指導計画はこの3年間計画を参考に作成する。3年間計画についても必要に応じてアレンジを見ながら実施しする。 | ・セルブテザインの学習の目的を確認 ・自分で生活管理をしていくために、自分の心構を考える ・自分の課題を見つめ、目標を立て方を知る ・自分の性格や気持ちを考えて、効果的に伝える方法を考える ・自分がかけがえない存在であると意識する ・身体が発育、男女の身体の違いについて知る ・英事柄健康に及ぼす影響について知る ・食生活や栄養素の役割や生活習慣について知る ・運動を継続することが健康維持につながることを知る ・具体的な運動計画を考える ・場面ごとでの社会人らしいふるまいやマナーについて知る ・周りのことを意識した行動を考える | ・セルブテザインの学習の目的を確認 ・自分で生活管理をしていくために、自分の心構を考える ・自分の課題を見つめ、目標を立て方を知る ・自分の性格や気持ちを考えて、効果的に伝える方法を考える ・自分がかけがえない存在であると意識する ・身体が発育、男女の身体の違いについて知る ・英事柄健康に及ぼす影響について知る ・食生活や栄養素の役割や生活習慣について知る ・運動を継続することが健康維持につながることを知る ・具体的な運動計画を考える ・場面ごとでの社会人らしいふるまいやマナーについて知る ・周りのことを意識した行動を考える |

4. 文献

- 別府哲 (2014) 発達障害・知的障害のある児童生徒の豊かな自己理解を育むキャリア教育. 別府哲 (監), 小島道生・片岡美華 (編).
- J. ブリア・西澤哲 (訳) (2009) 子ども用トラウマ症状チェックリスト (TSCC)・専門家のためのマニュアル. 金剛出版.
- 児童思春期精神保健研究会 (2003) ASEBA に関し <http://www.spectpub.com/CBCL/CBCLaboutASEBA.pdf>
- 小畑伸五・武田鉄郎 (2017) 知的障害特別支援学校高等部の軽度知的障害教育課程を履修する生徒の情緒および行動上の課題に関する研究. 特殊教育学研究, 55 (2).
- 国立特別支援教育総合研究所 (2010) 知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校に在籍する児童生徒の増加の実態と教育的対応に関する研究. 平成 21 年度研究成果報告書.
- 国立特別支援教育総合研究所 (2012) 特別支援学校 (知的障害) 高等部における軽度知的障害のある生徒に対する教育課程に関する研究ー必要性の高い指導内容の検討ー. 平成 22~23 年度研究成果報告書.
- 武田鉄郎他 (2012) 軽度の知的障害がある生徒の生徒指導に関する実践的研究. 自分づくりを目指した授業プログラムの構築. 和歌山大学教育学部附属校・公立学校との連携事業. 平成 24 年度成果報告書.
- 武田鉄郎他 (2013) 軽度の知的障害や発達障害がある生徒の内面を重視した指導法に関する研究. 和歌山大学教育学部附属校・公立学校との連携事業. 平成 25 年度成果報告書.
- 武田鉄郎他 (2014) 軽度の知的障害や発達障害がある生徒の内面を重視した指導法に関する研究. 和歌山大学教育学部附属校・公立学校との連携事業. 平成 26 年度成果報告書.
- 武田鉄郎 (2017) 武田鉄郎 (編) 発達障害の子どもの「できる」を増やす提案・交渉型アプローチ. 学研プラス.
- 滝吉美知香・田中真理 (2010) 自己理解の視点から見た広汎性発達障害者の集団療法に関する先行研究の動向と課題. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58 (2).
- 宅香菜子 (2012) 第 3 章 アメリカにおける P T G 研究ー文化的観点から. 近藤卓 (編). P T G 心的外傷後成長トラウマを超えて. 金子書房.
- 山本美和子・武田鉄郎・小山秀之・宇井康介 (2017) 発達障害のある又はその可能性のある中高生のための感情コントロールプログラム「和歌山どんまいプログラム」の開発とその効果. LD 研究, 26 (3).